

イギリスの学校を訪問して

理事 神戸大学教育学部教授 鈴木 正幸

この度のイギリス旅行では、全個連の熱心な先生方の仲間に、私の学生たちも加えて頂き、一緒にイギリスの学校を見学することができた。

一言でその印象を言えば、小学校、中学校を通して、子どもの表情が生き生きしていること、目が輝いていること、また中学校においては、「大人になっている」と思わせることであった。その二点は日本に帰ってきて日本の学校の子どもの表情を見る時、最も大きな違いとして印象が強い。日本の子どもたちはどうしてこんなふうになってしまったのであろうか。

欧米諸国と比較してみても、特に小学校段階で日本のような一斉指導の形態をかたくなに守っているところはもう他にない。

我が国で一斉指導が取り入れられたのは、明治に入ってからである。欧化主義のもと何でも欧米から取り入れて学んでいこうという姿勢であった。その一斉指導の授業形態のスタートはイギリスであった。それもそんなに古いことではない。一部のエリートの子弟のための学校と教育の歴史は、イギリスはもちろんヨーロッパ各国で大変古いが、民衆のための教育ということはほとんど考えられていなかったといってもよい。世界で最初に産業革命を興したイギリスは、その進展とともに児童労働の悲惨な状況が目にあまり、子どもたちの就労時間を減少させる目的と相補して、就学の機会を義務的に増大させる政策がとられるようになった。教員養成の組織化がなされていないのだから、止むを得ず一人で大勢の子どもを教えなくては行かない。これらの教授法を開発したのが、ベルやランカスターである。そして助教生という助手を駆使して行なうという意味から、助教生制度とも言われる一斉指導方式が生まれたのである。

「国民学校協会の教師ベルは、インドのマドラスで行なった実験をもとにマドラス方式として、内外学校協会系のキューカー教徒ランカスターは、バラロードでの実験に基づきそれぞれに助教生制

度を展開させた。子どもたちの中から選び出された助教生（モニター）が教師の指揮の下に、一度に多人数の子どもを一斉指導するものである。これはモニトリアル方式または二人の名前をとってベル・ランカスター法とも呼ばれる。この時代の民衆の子弟の初等教育は子どもたちの成長と発達に資する教育的観点に立つというよりも、社会秩序を維持することがその焦眉の課題とされていた。それゆえ助教生学校では宗教教育としての徳性の涵養が優位に立ち、従位としての読み・書き・算は、助教生たちによるオートメ化システムが安上がりで能率的な方法として重宝されたといえよう。民衆管理の支配階級の論理が一つの表れ方であった。」（鈴木「イギリスの教員養成」第一法規『学校の歴史』第5巻）

確かにこの時を期に、イギリスの民衆の子弟に就学の機会を与えるということにおいておおいに意味があった。しかし、必然的に、形式的、機能的にならざるを得なかったのである。教授がオートメ化され、教育が質より量において意味があったからである。教育の効率が問われたのである。

明治の教育改革において、この一斉指導の方式をよかれと思って取り込んできたわけであるが、すでにその発進国である欧米諸国では個別指導の形態が中心となっている。

私は、今日の日本の学校教育を、3Kなる言葉で表現している。一つは形式主義、二番目は画一化、三番目は硬直性である。一斉指導はもともとこの三つの性格を持ちやすいものであったといえよう。これが日本的、中央集権的な教育行政の中でうまく定着化してきたのである。今日第三の教育改革と言われているその目玉商品が、「個性の重視」である。個性化教育が、本当に現場の学校教育の改革をしていくことが、どれだけなされているのであろうか。

この度関西にも個性化教育研究会を発足させることになった。大方のご協力を待つ次第である。

第3回 海外研修旅行

—OPEN SCHOOL TOUR—
平成4年8月17日～29日

恒例となった海外研修の3回目が、8月17日から29日にかけておこなわれました。今回は前回までのアメリカではなく、オープン教育の源流ともいえるイギリスの学校参観とバリの美術館見学も併せておこなうという、すばらしいツアーとなりました。北は青森から南は長崎まで、全国各地から集まった参加者は、加藤先生を含め17名。その中には、現在アメリカ在住という方もいらっしゃいました。

また、この他、ロンドンで神戸大学の鈴木正幸先生のグループ(約10名)と合流し、イギリス国内をバスで移動しました。

【日程】

- 17日 バリ経由ロンドン着
- 18日 ロンドン市内見学(ロンドン塔、大英～19日 博物館、ウェストミンスター寺院)
- 20日 ガンタベリー見学
- 21日 パース、オックスフォード見学
- 22日 ストラッドフォード見学
- 23日 湖水地方(ウィンダーミア)見学
- 24日 学校参観
 - ・ Colne Primet High School
 - ・ Primet County Primary School
- 25日 学校参観
 - ・ Brunshaw County Primary School
 - ・ Burniey Walshaw Girls High School
- 26日 マンチェスター空港からバリへ
バリ市内見学(オペラ座など)
- 27日 バリ市内見学(エッフェル塔、凱旋門～28日 ルーブル美術館、オルセー美術館、ショッピングなど)
- ドゴール空港発
- 29日 成田着

ランカシャー地方での学校参観は、州の教育行政担当者と加藤先生との深いつながりもあって、どの学校もあたたかく私達を迎えてくれました。

今回のツアーでも、常連をはじめ初めて参加された方々を含め楽しく二週間を過ごすことができました。飛行機やバスの中、あるいはホテルでのひとときなど多くのふれあいができたことを喜ん

でいます。

最後になりましたが、今回のツアーの企画、準備等の一切の面倒をみて頂きました加藤先生、小堀川さんに深く感謝申し上げます。

(研修部 河合 剛英)

イギリスの夏休み、日本の夏休み

谷口 育史(兵庫県)

夏のイギリスは涼しい。とは聞いていた。が、同じ北半球の夏である。暑がりの私は、高をくくり旅行の用意をすませた。行ってみると、日本の秋である。涼しいというより肌寒い。雨模様になると、セーターが欲しくなる。後悔した。

ふと、次のような疑問が浮かんだ。なぜ、イギリスでは、こんなに涼しいのに夏休みなのか。日本の長野県や東北、北海道では、夏休みが短いと聞いている。これなど涼しくて学習に差し支えないから短いのであろう。なぜ、学習に差し支えない気候なのに、長期間の休みをとるのか。

見学先は、イギリス中部の工業地帯、労働者階級の師弟が通う、小・中・高等学校であった。この地域の学校は、伝統的に夏休みを交代でとるそうである。工場を止めないためだと聞いた。訪問した学校は、新学期が始まってから、一週間たっていた。まだ夏休み中の学校もある。別に、暑くないからいつ始めても問題ないのである。

日本の夏休みは、学習や仕事ができないから休むのである。日本では、休むこと自体、抵抗がある。でもイギリスでは、休むことは自分の人生にとって必要不可欠のことなのである。バカンスの意味が日本とまったく違うと実感した。

彼らが実現している5日制や長期の休みは、自分たちの人生設計の中で大切なものとして位置づけを必要としているのであろう。私たちの国で、労働時間の短縮をめざしたり、教育に5日制を取り入れたり、生涯教育を考えると、各自がハッキリとした人生設計の中で考え実現していくようにしないといけないと感じた。

肌で感じる気候、文化の違いは、行ってみたいと腑に落ちないと実感した旅行であった。

夢のような13日間

峰添 奈津子（長崎県）

3年前のこと、ふらっと立ち寄った本屋で偶然見つけた、一冊の本との出会いがなかったら、今回のツアーに参加することもなかっただろう。その本のタイトルは、「個別化・個性化教育の理論」（加藤先生著）。なぜか、この本の“個性化”という言葉にひかれ、つい購入してしまったのだった。これが、個性化教育を知る最初のきっかけとなった。

13日間のこのツアーは、夢のように過ぎた。

初めての海外旅行だったが、メンバーの方もい人たちはかりで、とても楽しい旅だった。ロンドンの古風なしっとりとした煉瓦造りの街並み、スーツ姿のすてきな紳士、ウィングミアの湖畔の景色、羊や馬が遊ぶ広大な牧場、荘厳な感じのする数々の寺院やオックスフォードのカレッジ、ハーブ栽培やシェイクスピアで有名な、ストラッドフォード・アポン・エイボンなどイギリスのすばらしい風景に出会い、この景色をそのまま宝箱にでもつめておきたいと思った。ロンドンのリージェントやボンドなどのショッピングストリートでは、多くの日本人観光客を見かけた。自分もその一人として、少々恥ずかしくなった。

コイン・プリメット中等学校では、私たちひとりひとりに、案内役の子どもたちがつき、各教室を回って、説明をしてくれたり、授業と一緒に受けることができた。しかし、子どもたちが話す早口の英語を理解できなかったことが悔やまれる。聞きたいことが、たくさんあったのに…。身をもって、自分の英語の会話力のなさを思い知った。バーンレイ・ブラウンショー小学校での可愛らしい子どもたちに、私は思わず「ハロー」を連発。おやつタイムになると、ビスケットやジュースが子どもたちに配られ、先生方もとても気さくで、規模は小さいが、どこか潤いのある、ゆとりを感じさせる学校の雰囲気がうらやましくなった。

現地の人々と思うように話せるようになること、これが、今回の海外旅行の目的のひとつであり、現在、英会話を必死で勉強している。

オープンスクールの原点

松本 真（佐賀県）

念願のオープンスクールツアーに参加し、イギリスの学校の一端を見学できたことは有意義でした。個別化・個性化の研究をすすめるべきならば、一度は自分

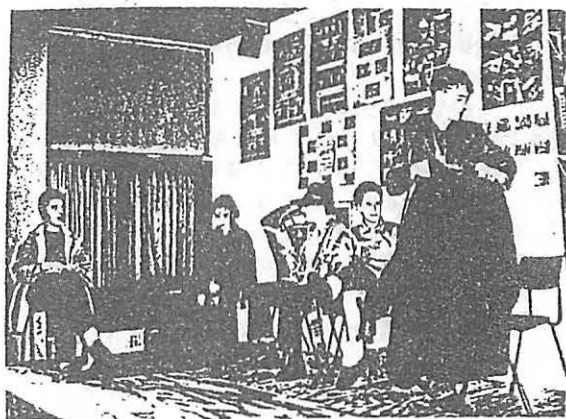
の目で確かめておきたかったからです。

イギリスでは、4校を訪問しましたが、印象的な学校2校を紹介してみたいと思います。

Colne Primet High SchoolとPrimary Schoolは共に隣接した学校。ハイスクールは12才～16才までの生徒がいて、とても明るい雰囲気でした。幸い授業にも参加できたわけですが、理科の授業では、一人の先生が講義をし、サブの先生が実験の準備や用具の準備をしていました。授業スタイルは一斉指導も多く、日本の中学校とそれほど変わっていない印象を受けました。

この学校で特徴的だったのは、ドラマの時間です。一週間に2回組み込まれているということですが、メイキャップの用具や衣装の豊富さ、ステージの設定など実に手のこんだものです。日本で言うならば芸術科コースといったところでしょうか。最近、日本の小学校の中にも表現力を育成するというで演劇を取り入れた学校がありますが、イギリスのドラマと相通ずる面があると思います。一年に一回クリスマスに全校上演をするために、生徒はみな張り切っていました。自分が出せる（表現できる）すばらしいチャンスだし、それに打ち込むこともできるからです。日本人に欠けている表現力、その改善の方法を垣間見た感じがします。

隣の小学校は伝統的なレンガ造りの校舎建築で見た目にも立派な建物とは言えませんが、チャーミングな女性校長のもと、家庭的な雰囲気の学校でした。今回は紹介にとどめることにします。



ドラマの授業風景
(Colne Primet High Schoolにて)

全個連的、今夏旅遊記

加藤 久美子 (千葉県)

今回の旅行中皆の合言葉は「いざ、生活科。」まあ聞こえは研修っぽいですが、何という事は無い。自分達で切符を買い、道順を探し目的地に行くのです。食事観光も、いかに工夫して時間内にできるか。学校訪問に到着は一対一の英語ガイド(学生)付き教室探検。真にスリルと浪漫そしてエキサイト感溢れる研修? 旅遊でした。「もっと庶民の生活がしたい。」とばかりに一人歩きをした私でしたが、そんなわがままも包んでくれる大様さもありうれしかったです。そうそう前述のガイド嬢・授業に参加してきた音楽の先生と文通を始めました。うらやましいでしょう。貴重な収穫です。肝心な学校訪問の様子は、きっと私以外の人が上手に報告して下さっている事と思いますので、そちらを。ただ自分が手探りでやっている事(自学他)との共通点を見付け喜んだり、個人で学べる底力(国民性でしょうか)を感じ考えさせられたりの連続でした。やはり奥は深いですね。

英国はやはり田舎が良かったです。是非皆さんも行ってみて下さい。バースの街並。終日ボケーとしていたかった巨大石群…。

バリは名付けて「かけ抜けた青春」でした。二大美術館を共に二時間半で見学したのです。皆すごいパワーです。

しかし、時に軟弱者でもありました。実はなんとホテルで味噌汁パーティーなる宴を催していたのです。御飯に味噌汁、御茶と。遂にはバリのなんと一等区でラーメンまで食べてしまうのです。最後まで抵抗していた私めも仕方なく。『正直言って、おいしかったです。』

日がたつにつれて会の名の如く皆open mind に自然体で無邪気にワイワイと。今あなたはopen mindですか。しかし、そんな人達がいざとなると(参観・講義)すごかったです。うまく言えませんが、底力のある人の柔らかさでしょうか。どんな記念品より重く残り、今後の糧となれそうです。

「漱石記念館」を訪ねて思ったこと

石沢 寿子 (齊森県)

ロンドンの外れにある漱石記念館をKさんとガイドブックを頼りに探し当てるのに約3時間もかかってしまった。私たちは、ここにたどり着くまでに多くの人達に場所を尋ねたが、どの人も片言の英語を聞き取って親切に教えてくれた。

この記念館は、イギリス留学(1900~1902)をし

た漱石(33才)の最後の下宿先の向い側にある。「Museum」というと大きな建物を思い浮かべるが意外にも普通のアパートの一室にあって驚いた。

館長は恒松さんという方で、個人で管理している。室内には、漱石の著作や留学中の資料などがずらりと並べられ、大きな油絵の肖像画が飾られている。恒松氏の事務机は、漱石の下宿を毎日眺められるように据えられている。漱石に対する熱心な研究心や思い入れが伝わってきて、彼のロマンのように思えた。そして、それは、なぜか、オープンスペースを生かして子どもたちの個性を伸ばしてあげられるような豊かな教育をしたいという思いで、個性化を勉強している私と相通するものを感じた。(齊森の公立にはオープンスクールはまだないのです。)恒松氏の夢は、もちろん向いの建物を記念館にすることだ。

私が二つの小学校、中等学校を訪問して受けたカルチャーショックとは、ナショナルカリキュラムをすすめるながらも、子供を個人として尊重しているということだ。だからこそ、どの子も自分の意思をきちんと表現できるのだろう。実は、漱石も同じショックを受けたのではないだろうか。「自分の自由を愛するともに人の自由を尊敬するように、子供の時分から社会教育をちゃんと受けているのです。」(「私の個人主義」から)

事務局だより

○関西地区に「関西個性化教育研究会」が発足するという、うれしいニュースが入りました。只今、準備中だそうです。詳しくは別紙のお知らせを御覧下さい。

○本年度の会費未納の方は、至急納入願います。

□座番号 東京0-194394

加入者名 全国個性化教育研究連盟

〈事務局への問い合わせ・連絡先〉

〒115 東京都北区赤羽南1-16-2-504

☎ 03-3903-4780

庶務部長 佐久間 茂和

全国個性化教育研究連盟会報 第23号

平成4年10月25日発行

編集責任者 事務局長 高浦 勝義

編集 広報部 五十子 晴美